目　次

序　文……1
序　章……11
第一章　平仮名表記の規範……21
第一節　室町時代の平仮名資料に見られる一表記法
——入声音・促音表記を中心として——……23
第二節　大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相……43
第二章　表記に反映した筆記者の特性……83
第一節　梅沢本に見られる『栄花物語』の成立・転写の様相
——表記・音便形の特徴を中心にして——……85
第二節　『日葡辞書』の引用文におけるローマ字綴りの改変について……100
第三節　キリシタン版ローマ字資料の表記と読み
——ローマ字翻字者との関係から——……113
第四節　国立国会図書館蔵古活字版『伊曽保物語』における文字使用の二部性……137
第五節　まとめ……153
第三章　『平家物語』の接続詞とその継承……155
第一節　延慶本『平家物語』の接続詞……157

第二節　延慶本『平家物語』の地の文の展開
——接続詞の用法に注目して——……174
第三節　覚一本『平家物語』の接続詞……190
第四節　天草版『平家物語』の接続詞……209
第五節　まとめ……234
第四章　推量表現の変遷……237
第一節　延慶本『平家物語』の「ムズ」……239
第二節　『太平記』の推量表現……252
第三節　「うず」の消長……267
第五章　助詞と文章表現……285
第一節　『太平記』における希求・懇請の言い方について
——終助詞「かし」の用法を中心として——……287
第二節　キリシタン資料における終助詞「かし」……305
第三節　中止法的に用いられる助詞「し」……320
第六章　キリシタン資料における漢語……337
第一節　『コンテムツス・ムンヂ』の漢語……339
第二節　天草版『平家物語』と原拠本の漢語……362
第七章　文献の性質と言語事象……389

第一節　『栄花物語』の口語的側面……391
第二節　古鈔本『宝物集』の文章構成とその文体
——最明寺本と書陵部本巻四部分とを中心にして——……406
第三節　『平家物語』の文末表現
——覚一本と延慶本との相違について——……422
第四節　まとめ……442
終　章……443
既発表論文との関係……454
あとがき……456
索　引……459

「使」（ルビ「つかい」）（一四）の如く「つ」を用いている。当該箇所を抄出すると以下の如くである。

資料Ⅰ（ルビを漢字の下に掲げる。）

珍物 ちんふツ 前日 せんしツ（一三） 依 よツて（一四） 喜悦 きゑツ（一六） 依 よツて 仕 つかまツり（一七） 大切 たいせツ 静謐 せいひツ（一八） 吉慶 きツけい 仍 よツて 以 もツて（二〇） 引物 いんふツ 畏悦 いゑツ（二一） 被拵 あツかはれ（二二） 節々 せツ〳〵 言舌 こんせツ（二三） 説法 せツほう（二四） 分別 ふんへツ（三〇）（括弧内の数字は書状の通し番号）

このうち、舌内入声音で終わっているもので『日葡辞書』に掲出されているものは次の通りである。下段に『日葡辞書』の見出し語表記を掲げる。

ちんぶツ Chinbut. Mezzuraxij mono.
ぜんじツ Ienjit, 1, xenjit. Mayeno fi.
きえツ Qiyet. Yorocobi.
たいせツ Taixet.
せいひツ Xeifit. Xizzucani vosamaru.
いんぶツ Inbut.
せツ〳〵 Xetxet. vide Xexxetni. Xexxet. 1, xexxetni.
ごんぜツ Gonjet. Cotoba xita.
ふんべツ Funbet.

右の結果から舌内入声音は閉音節を保っていることが分かり、それが特別な仮名で表記されていることが分かる。

ここで取り上げた世阿弥の表記法及び『貴理師端往来』の表記法からすると、片仮名表記・平仮名表記共に従来の表

記法では表し得なかった音韻の差異を細かく表記に反映させるという表記意識が認められるのである。

従来、平仮名表記における入声音・促音の表記にはツの仮名が用いられるということで、ツの変体仮名の内での更に細かな仮名の用い方にまでは言及されていなかったのであるが、このようにキリシタン資料の内に音韻の差異を表記に反映させる方法を採っている文献が存在しているのであり、平仮名表記史上注目せられるのである。

しかし、この表記法もキリシタン資料に特有のものであるとは考えにくいところから、当時の国内資料においても、この表記法がひとつの有力な表記法として行われていたことは想像に難くない。

一　表記法の検証

室町時代の平仮名資料においては、ツの仮名として先述した「ツ」のほかに「つ・ほ・ほ・ほ」（以下、「ほ」は「徒」で、「ほ」は「津」で表記する。）などがある。『貴理師端往来』で見られた如き、「つ・徒・津」などで表記される開音節〔tu〕と、入声音・促音を「ツ」で書き分ける表記法はどのように現れ、かつそれは『日葡辞書』等で推測される音韻とどのように関わっているのか、少しく同時代の文献について検証する。

先に、世阿弥が片仮名表記において入声音・促音を小文字のツで表記していることに触れた。片仮名表記において入声音・促音を開音節の〔tu〕と書き分けようとすることが認められるならば、同様のことが平仮名表記に認められてもよさそうである。今、世阿弥自筆のものを見ることができないので謡曲関係の文献を見ると、金春本の『花鏡』（永享九〈一四三七〉年　貫氏筆）[5]がある。本書は「貫氏」とあるが、それは書体の特徴等からして金春禅竹のことであろうと推定されているものである。

ツの仮名としては「あ徒かふ」「う徒くし」などの「徒」、「うつる」「つなぐ」などの「つ」、「たいせツ」「けツく」などの「ツ」の三種の仮名が用いられている。分類して掲げると次の如くである。